

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 白木 優馬

論 文 題 目

感謝による恩送りを支える心理的メカニズムの解明

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 五十嵐 祐

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井 次郎

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 中谷 素之

論文審査の結果の要旨

人は、他者から親切にされたあと、その恩人に対して親切にすることで恩返しをする。そしてときには、別の第三者に対しても親切にすることがある。この行為は、恩返しに対比させて「恩送り」と呼ばれる。恩送りは、コストを支払って他者に利益をもたらす利他行動の一つの形態として位置付けられる。これまで、恩送りという利他行動の進化的基盤を明らかにするために、主に進化心理学の立場から理論的な側面からの検討がおこなわれてきた。しかし、従来の研究では、恩送りを行うことがその行為者にとっての利益となる条件が限定的であることが示され、恩送りが進化的基盤を有する可能性が低いことが示されてきた。その一方で、現実社会における恩送りの実例は数多くあり、恩送りに関する理論的予測と現実社会との間には乖離が存在している。

そこで本論文は、人が自分自身にとって損となる行動である恩送りをおこなう理由を明らかにするため、感謝の感情を軸として、恩送りの生起に関する至近因的な心理的メカニズムの解明を試みた。本論文では、利他行動の受け手に着目し、4つの実験を通じて、ある利他行動が、受け手の認知、感情、動機を介して、利他行動である恩送りを生起させるまでの一連の心理的メカニズムに関する検討を行った。

本論文は6章から構成される。第1章では、恩送りを含む利他行動に関する先行研究に関する諸領域の先行研究をレビューしたのち、恩送りの心理的メカニズムを解明する上で未だ検討されていない重要な課題を指摘し、感謝感情に注目することの意義について説明を行った。以下の第2章から第5章では、これらの課題を解決するための実験結果を報告した。

研究1（第2章）では、利他行動を行う際に、感情的基盤と認知的基盤に基づく判断が葛藤する状況において、いずれの判断が優先されるかを検討した。シナリオを用いた実験では、過去に援助を受けたことのある恩人が、集団内の他者からはネガティブな評価を受けている状況を設定し、その恩人が援助要請をしてきたときの要請への応諾傾向について検討した。実験の結果、恩人からの援助要請の応諾傾向に対しては、その恩人が周囲から得ているネガティブな評判は影響を及ぼさなかった。つまり、たとえ援助することで自分の評判の低下につながってしまう相手だったとしても、人は過去の援助経験を優先してその相手を援助することが明らかとなった。このことは、利他行動を駆動する感情的基盤の影響の強さを示すものであり、恩送りをする場面においても、認知的基盤よりも感情的影響が重要な役割を担っている可能性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

研究 2 (第 3 章) では、利他行動の受け手に喚起する感謝と負債感の 2 つの感情に注目し、それぞれの感情を喚起する個別の要因を明らかにした。実験では、利他行動の受け手にとっての価値と、利他行動の送り手が支払うコストを操作し、それぞれの要因が受け手の感謝および負債感に与える影響を検討した。その際、従来の研究で用いられてきた自己報告式の感情評定尺度に加え、それぞれの感情が恩送りにおよぼす影響の違いをもとに、行動指標による測定も行った。実験の結果、利他行動の受け手にとっての価値は感謝を喚起する一方で、負債感の喚起には影響を及ぼさないこと、利他行動の送り手のコストは受け手の負債感のみを喚起することが明らかとなった。

研究 3 (第 4 章) では、感謝の喚起が恩送りを促す心理的メカニズムを解明するため、感謝の喚起によって、他者との関係を形成したいという関係性欲求が生じる結果、利他行動が促進されるというモデルを検討した。実験の結果、感謝が関係性欲求の充足を経て募金を促すという間接効果が見られた。このことは、恩送りの背景に、従来の研究で想定されてきた将来的な自己利益の追求という動機とは別に、短期的に自己の欲求を解消することを目的とした心理的プロセスが存在する可能性を示唆する。

研究 4 (第 5 章) では、感謝による恩送りを支える認知的メカニズムを解明するため、ポジティブ感情が社会的ネットワークの認知に影響を与えるという先行研究の知見をもとに、感謝の喚起が社会的ネットワークの認知に与える影響を検討した。実験の結果、感謝を喚起した場合においてのみ、社会的ネットワークの認知の正確さが高まること、さらに地理ネットワークとの比較を行った場合も、感謝がネットワーク認知の正確性を高める効果が社会的ネットワークに固有であることが明らかとなった。

第 6 章では、これらの研究知見を総括し、本論文の意義について述べるとともに、今後の課題、および展望について議論した。本論文では、認知的基盤に基づく利得計算を超えて、感情的基盤が利他行動を駆動することを明らかにした上で、利他行動が感謝の喚起を介して新たな利他行動を導くまでのプロセス、すなわち感謝による恩送りの心理的メカニズムを明らかにした。一連の研究から、恩送りという場面において、人は自己利益よりも感情的反応に従った行動をとること、さらに恩送りのメカニズムを理解する上で、感情的要素が重要な役割を果たすことが明らかとなった。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本論文の特色は、「感謝」という感情的反応から恩送りを理解する点である。従来の研究では、恩送りを含む利他行動を理解する際に、自己利益を追求するという人間観が前提となっていた。これに対して、本論文は感謝を含む個人内の統合的な心理的メカニズムを明らかにすることで、恩送りの理解には、感情的反応に基づいて他者利益を追求するという人間観を導入する必要があることを主張している。これは、利他行動に関する研究に新たな視座を提供するものである。

本論文に対して、審査委員は慎重に審議を行い、内容に関して次のような指摘がなされた。(1) 感謝とはこころを持つとされるエージェントに限定的な心理状態なのか、動物でも見られるのか、(2) 感謝や恩送りといった現象の説明には、文化的な背景が影響するのではないか、(3) 関係性欲求は、サポートを受け取る側が充足するものであり、感謝することで欲求が生じるというのはなぜか、(4) 恩は仏教用語であり、アジア圏に固有の概念として捉えられる部分もあるが、海外における *pay it forward* の概念との整合性はどのように説明できるのか。

学位申請者は、これらの問題点や今後の課題についても十分に認識しており、審査員からの指摘に対しても適切な応答がなされた。また、今後の研究活動を通じてさらなる検討を行う旨が述べられた。こうした問題点はあるものの、本論文は感謝に基づく恩送りの生起メカニズムについて、実験的な手法を用いて体系的な検討を行っており、特に多様なサンプルを対象として利他行動の伝播プロセスを解明した点で重要であり、当該研究分野の発展に大きく寄与していると判断できる。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。